

# 聖化

2004.5.10

日本聖化交友会機関誌

No. 36



## 遠州聖会の恵み

東海聖化交友会・遠州支部長  
イムマヌエル磐田教会牧師

佐藤道直

〈遠州聖会〉は、東海聖化交友会

の支部として御教導とお交わりを頂  
きながら、幸いな聖化の集会をもつ  
ています。

聖潔の経験と成長を求めつつも、  
名古屋までではなかなか、信徒を連れ  
て行くことができないもどかしさの  
中で、地元の先生方の強い要望と熱  
意から6、7つの教会が結集して毎  
年一回、恵みの時をもたせて頂いて  
います。聖化交友会の恩典として毎  
年、各教派から素晴らしい講師の先  
生方を小さな聖会にお迎えすること  
ができ、心から感謝しています。

第一回からの講師とテーマを記し  
ます。

第一回 イムマヌエル・竿代信和先生

テーマ「きよめの基本と実際生活」

第二回 ホーリネス・小林和夫先生

「キリスト者の完全の角度か

らみた聖化」

第三回 ウェスレアン・ホーリネス、

本間義信先生

「信仰生活のきよめ」

第四回 イムマヌエル・河村襄先生

「栄光から栄光へと」

第五回 ホーリネス・藤巻充先生

「恵みとしてのきよめ」

第六回 ウェスレアン・ホーリネス、

峯野龍弘先生

「聖められた生涯の祝福」

第七回 日本イエス・工藤弘雄先生

「喜びに輝くクリスマス」

第八回 イムマヌエル・竿代照夫先生

以下、第八回の報告を申し上げます。

日時 二〇〇四年二月十五日(日)

午後四時—六時(一回だけ)

出席人数二一六名(六教会)

テーマ「主の愛を私に」

引照 第一コリント十三章1—13節

序 十二31 よりすぐれた賜物とし  
ての愛。十四1愛を追い求めなさい。

十三章4—7節を中心に十五の愛  
の特質を具体的に語られました。メ  
ッセージを聞きながら、その一つ一

つについて自分自身を(五段階で自  
己採点)するように言われました。

「愛はねたみません。」について、

(1)とても駄目だ、(2)かなり駄目だ、

(3)まあまあ、(4)まあまあ大丈夫そ  
うだ、(5)恵みのゆえに自分を褒めてあ  
げたい。

鏡にうつされるように、自らの姿  
を探られ、最後に恵みの座が開かれ、

「主の愛を私に」と殆どの方が前  
に出て祈りました。

# 第18回聖化大会教勢・財勢報告

## 教勢

月日	集会名	集会人数
11月9日(日)	プレイズ&トーク	202
11月10日(月)	セミナー	187
	レセプション	41
	講演	270
	神学生交歓会	80
	聖会Ⅰ	317
11月11日(火)	女性大会	328
	学びの時(分科会)	251
	聖会Ⅱ	308

## 財勢

集会名	席上献金	予約献金	合計
聖会Ⅰ	263,059	319,300	582,359
聖会Ⅱ	353,292	790,300	1,143,592
講演	233,313	465,500	698,813
女性大会	268,496	390,000	658,496
青年大会	87,895	—	87,895
その他	21,000	4,100	25,100
合計	1,209,055	1,969,200	3,196,255

した。主  
特に同博

## 聖会Ⅰ

### 「暗黒の牢獄から自由の光へ」

使徒の働き十二章五—十一節  
デニス・アツプルビー博士

「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、・・・」ルカ4・18 これはわたしたちに対する主イエスのマニフェスト(公約)です。

チャールズ・ウェスレーの讚美歌、  
And Can It Be? の一節に「長い間私の魂は牢獄につながれて、罪と人間性の夜の中に固く縛られていた。あなたの目が私を生かす光とまじり合い、私は光に照らされた牢獄で目覚めた。私の鎖は解け、私の心は自由になった。私は立ち上がり、歩き始め、あなたに従った。」とあります。この讚美歌は使徒の働き十二章のペテロの経験に基づいており、チャールズ・ウェスレー自身と、その兄ジョンの経験でもありました。チャールズもジョンも家庭にあっては厳格な宗教教育を受け、やがて牧師となったはずの彼らが、なお恐れと疑いの牢獄、宗教的牢獄にいました。断食と祈りに励み、聖書を注意深く勉強し、施し、規律正しい生活をしましたが、不信仰の暗闇から解放されることはありませんでした。

私たちを縛りつける牢獄とは目に見え

る壁や鉄格子とは限りません。私たちの心を縛るあらゆるものが牢獄となります。麻薬、タバコ、不純なセックス、汚れた思い、賭け事、汚い言葉、憎しみ、失望感、挫折感、病氣などは人間を囚人にしてしまいます。クリスチャンであってもそのようなものの奴隷になっていることがあり得ます。私の罪が赦されたことは知っていますが、本当に自由になっているでしょうか。自由になった他人を見るのがあっても、自分自身は痛みの中にあるのを見出します。

誰がこのような私たちを顧みてくださるのでしょう。あなたの周りにはあなたが解放されるように祈ってくれる人がいます。私自身もそうでした。私は若い時に軍隊で救いにあずかりましたが、私が救われるために5年間お祈りをしてくださった婦人がいました。夫が妻のために、妻が夫のために、両親が子どものために、子どもが両親のためにとりなすのです。またクリストご自身が私たちのためにとりなすと言っておられます。誰かが私たちの自由のために祈っていただくのです。

クリストは死んでよみがえられたので、罪と死に勝つ力が明らかにになりました。

私たちがどんなに大きな問題を抱えていたとしても、クリストにとつて大きすぎることはありません。クリストは過去の罪の赦しだけではなく、今私たちを束縛する罪から解放することができます。クリストはすでに牢獄のドアを開き、私たちを自由な世界に招いておられるのです。私たちは御霊に従い歩んで行きましょう。

フランス革命時代、パリの牢獄につながれていたマネという医師がいました。彼は釈放されたのですが、救出をする人々がやってきたとき、靴を修理する仕事をしていた。それは牢獄にいた間に課せられていた仕事でした。牢獄から出たのに、その心はまだ牢獄の中にいたのです。彼がしなければならなかったことは、牢獄にとどまることではなくて、立ち上がって、外に出ることでした。私たちも同じことが求められています。なぜなら、クリストはあなたをすでに釈放しておられるからです。

「子があなたがたを自由にするなら、あなたがたは本当に自由なのです。」(ヨハネ8・36)

(寺村秀樹)

# 第18回聖化大会 (関東) 報告

昨秋11月9日(日)―11日(火)まで、JHA 関東聖化大会が淀橋教会で開催され、講師デニス・アップルビー博士をお迎えして、恵みとチャレンジを頂きました。士的人格からかもし出される温かさに包まれた良き集会となりました。別表の如く、教財勢を報告し、下記に聖会のメッセージの概要を記します。

## 聖会Ⅱ

### 「光の中を歩もう」 第一ヨハネ 一章五―七節

デニス・アップルビー博士

12 イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」ヨハネ8・

51年前、大学を卒業したわたしはこのみことばで、奉仕の生涯に導かれました。「歩む」という言葉は旧約聖書で一般的に使われている言葉です。エノクやノアは神とともに歩んだと言われています。新約聖書においても、「愛の中を歩め」

(エペソ5・2)「御霊によって歩みなさい」(ガラテヤ5・16)「信仰によって歩みなさい」(第二コリント5・7)と言われています。この手紙を書いたときのヨハネは年寄りでしたが、真理に逆らう多くの敵と直面していました。イエスから直接聞いたメッセージとしてヨハネが強調したことが、神が光であるということと、光の中にいるかどうかで大きな違いが生まれることを私たちは知っています。

薄暗いレストランの中で食べ物に袖につけてしまっても、よく見えませんが、太陽の下に立つとそのしみははっきりとわかります。神の光の中を歩むときに、私たちの言葉、態度、行動のすべては裁

きなざる神の前にオープンとなります。聖なる神の前に、私たちは自分のすべてをありのまま見られる用意があるでしょうか。神はきよい方ですから、私たちはきよくあろうとするなら、100%真実でない、あらゆるものから離れなければなりません。どんな秘密も、隠れた野望も持つてはなりません。オープンになっているときにのみ落ち着いた心を持つことができます。

自分で気がつかない実態というものがありません。それは他の人を通して気づく必要のあるものです。私がまだ若い牧師だった頃、自分の欠点を指摘する手紙を、ある友人からもらいました。それらの欠点は牧師としての奉仕の生涯を損ないかねないものだと言っていました。彼が指摘したことは次のようなものでした。いつも予約した時間に遅刻すること、大切な事柄について忘れっぽいこと、ものを書くときにスペルをしばしば間違えることなど。その手紙を読んで、「こんな風には私は見られていたのか」と落胆し、傷つきました。こんな自分が奉仕を続けていけるだろうかと考えていたときに、詩篇27篇1節の「主は私の光、私の救い。」というみことばをいただきました。友人

を通して放たれた主の光はわたしの実態をはっきりと教えたのですが、それは私を滅ぼすためではなく、むしろ愛をもって救うためであることを知ったのです。

第一ヨハネ1・7で使われている「清める」という言葉は、ギリシャ語では「カサリゼイン」といいます。これは手足を洗うということを表す言葉です。イエス・キリストがきよめるといふときにはもつと深い意味で使われます。100パーセントきよくしてくださるので、誰かに覗かれることを恐れる必要はなくなり、キリストは私たちの罪を拭い去るだけではなく、心の中の生活をきよめてくださいます。

私たちの心に鍵のかかった部屋がありはしないでしょうか。他のすべてのものは見せることができます、ここだけは見せられない部屋がありませんか。この人だけは赦すことができないと、怒りと憎しみに満ちた閉ざされた心を持ってはいませんか。光の中を歩むということとは私たちの心の鍵をすべてイエスに明け渡してしまうことです。私たちはみことばの光の中を歩むことによって、きよく保たれる恵みを与えられます。

(寺村秀嗣)

# レイモンド・シェルホン先生の思い出 …よき働きの継承を目指して

チャーチ・オブ・ゴッド理事長 瀬谷グレース・チャペル牧師 伊藤昭吉

レイモンド・シェルホン先生は、七六年の生涯を終えて去る一月二四日、天にお帰りになられました。十八歳で日本の地を踏んだ最初の時から主に召されるまで、ただひたすら主と日本を愛し、その全生涯を主に捧げて走りぬかれました。

一九四六年米国軍人として初来日したとき、敗戦の惨禍に苦しむ日本人の姿に深く心をとらえられた先生は、その思いから一九五一年、川崎キリスト教会の設立へと導かれ、続いて教会が次々に生み出されて今日の宗教法人数チャーチ・オブ・ゴッドを見るに至りました。以来、五三年の間、群れを愛と真実をもって指導されて福音の宣教と教会の建て上げにその全てを注いでこられました。



ていることであると信じて、祈りと協力を惜しみませんでした。

先生が座右の銘のようにして心に刻んでいた言葉は、*Only one life soon be passed, Only what's done for Christ will last.* 「人生はすぐに過ぎ去る。ただキリストのためになされたことだけが残る。」でした。

二〇〇四年一月二四日、先生は生涯愛してやまなかつた日本の地、川崎で七六歳の生涯を閉じられ、主の御許に召されました。「キリストのためになされたことだけが残る。」といわれた働き、ホーリネスの宣証の継承は、群れの内外を問わず残された私たちの手に委ねられていることを思わずにはおられません。

## ●第16回札幌聖化大会

- ▼日時 2004年5月18日(火)  
19日(水)
- ▼会場 北海道クリスチャンセンター
- ▼講師 中島秀一先生  
(日本イエス・キリスト教団・荻窪栄光教会牧師)

## ●第8回栃木聖化大会

- ▼日時 2004年5月16日(日)
- ▼会場 日本ホーリネス教団・栃木教会
- ▼講師 大畠之成先生  
(基督兄弟団・水戸教会)
- ▼テーマ 「再臨と聖化」

## 総務リポート

▼第36号をお届けします。初期のホーリネスの戦士たちの召天が続きます。引続き聖化の宣証のために劳しましう。

(係)